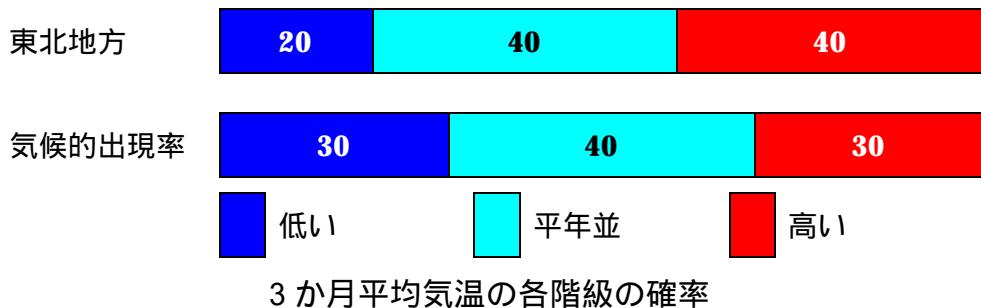


東北地方3か月予報(7~9月)の解説

平成11年6月21日 仙台管区気象台

1. 予想される天候

(1) 3か月平均気温の予想される各階級の確率(%)



[概要]

7~9月の3か月平均気温は、「平年並」か「高い」になる可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「低い」になる可能性は小さく、その確率は20%です。

(2) 天候の特徴

	7月	8月	9月
気圧配置	梅雨前線 太平洋高気圧	太平洋高気圧 一時寒気の南下	低気圧や高気圧が数日の周期で通過
天 気	日本海側は平年と同様に周期的に変化する。太平洋側は平年と同様に曇りや雨の日が多い。	平年に比べ晴れの日が多い。一時曇りや雨の日がある。	天気は周期的に変化するが、平年に比べ晴れる日が多い。
気 温	平年並	平年並	平年並
降 水 量	平年並	平年並	少ない

なお、3か月間[7~9月]の降水量は平年並でしょう。

<参考資料>

平年のおおよその天気出現割合(%)

	7月		8月		9月	
	日本海側	太平洋側	日本海側	太平洋側	日本海側	太平洋側
晴れの日(日照率40%以上)	50	44	62	55	53	49
雨の日(日降水量1mm以上)	36	36	31	33	42	39

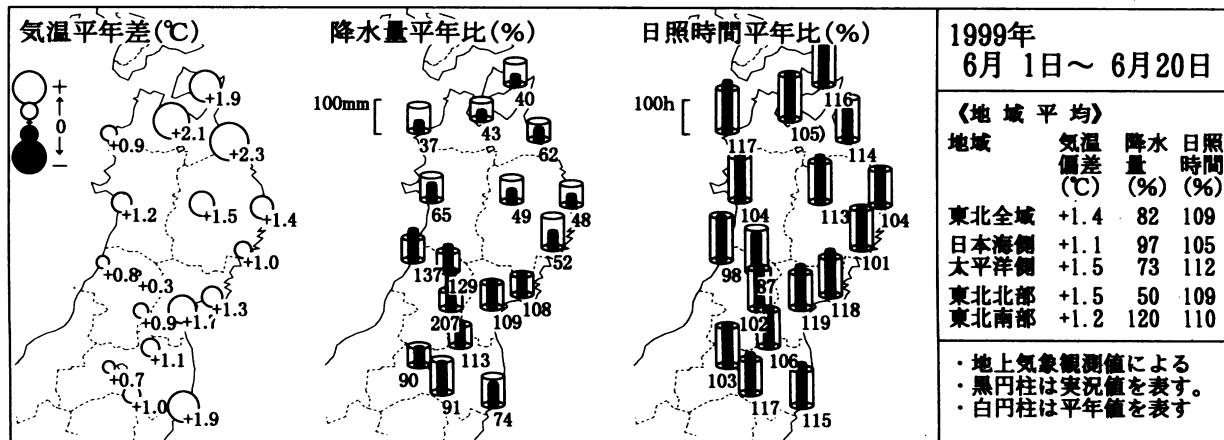
注:季節予報では、「日降水量1mm以上の日数」、「日照率40%以上の日数」を雨の日、晴れの日の目安として用いている。この2つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。日照率は、1日の日照時間を可照時間(日の出から日の入りまでの時間)で割った値である。

2. 前回(5月20日)発表3か月予報からの変更点

8月 降水量: 多い 平年並

3. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



東北地方における6月の平均気温、降水量、日照時間

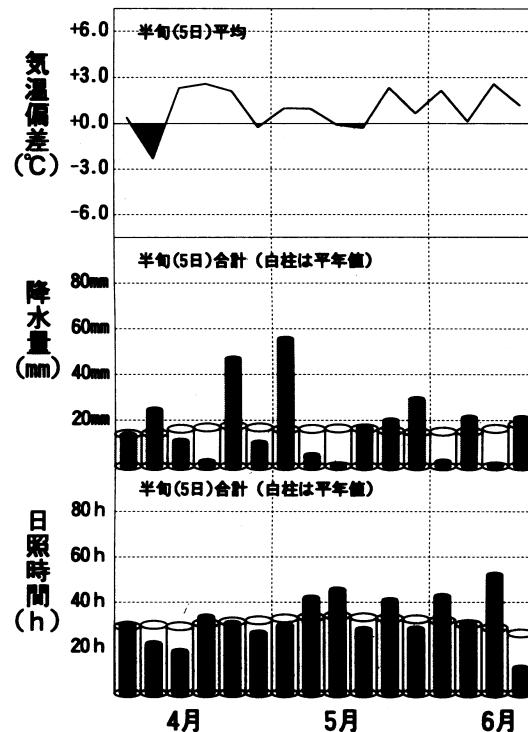
6月(20日まで): 上旬は、天気は数日の周期で変化した。梅雨前線が関東南岸から離れて停滞したため、南部を中心に高気圧に覆われて晴れる日が多かった。一方、北部は低気圧や気圧の谷の影響でぐずつく日もあり、8、9日は上空の寒気の影響で雷雨となった。

中旬も高気圧に覆われて晴れる日が続いたが、旬半ば以降、梅雨前線が日本付近に停滞するようになり、南部を中心に雨となった。

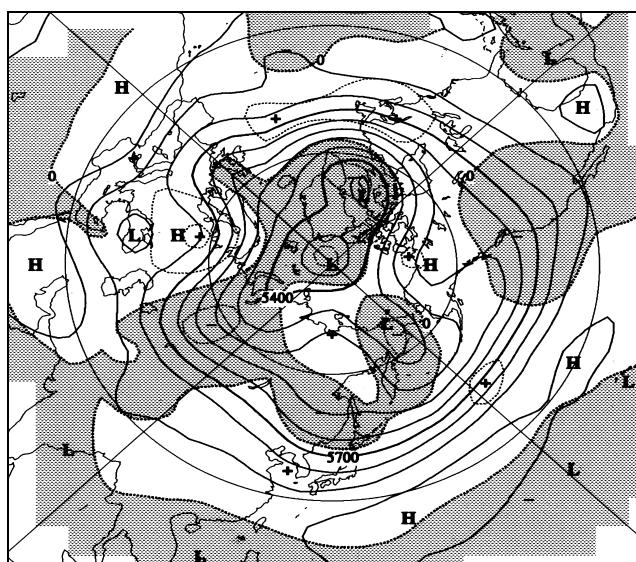
この期間の平均気温は平年より高かった。降水量は、南部で平年を上回ったが、北部は下回った。日照時間は平年を上回った。

梅雨入りは、6月2日に九州南部、3日に関東以西の各地方、7日に東北北部、南部と北陸地方で発表された。

台風は、4月23日に第1号、4月28日に第2号が発生し、6月2日には第3号が発生した。



東北地域半旬経過図



6月1～20日平均 500hPa 天気図

等値線間隔 60m

陰影部は平年より高度が低い領域

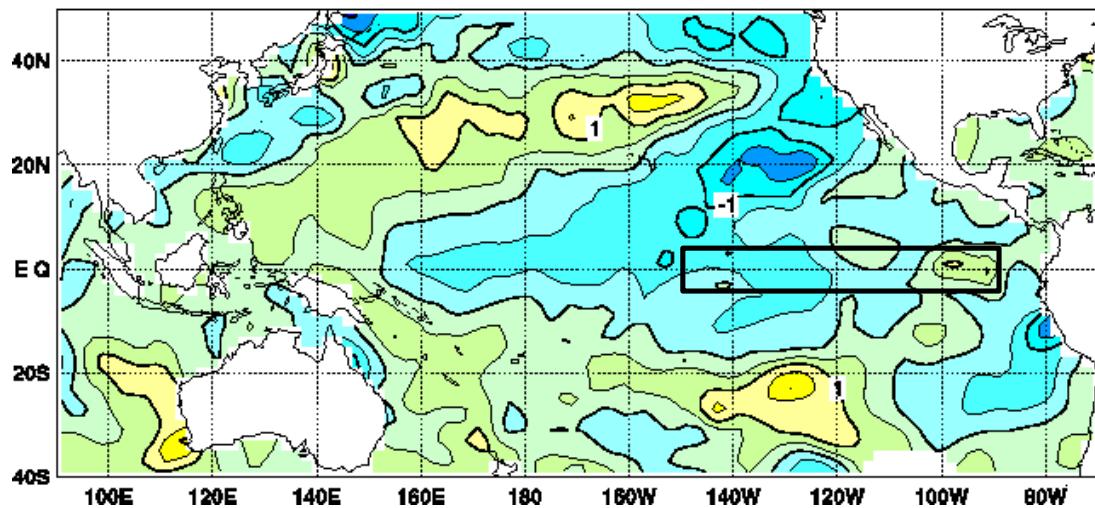
(2) 中・高緯度の循環

6月: 日本付近は東西に広く正偏差に覆われ、高気圧に覆われる日が多かったことを示す。中旬半ばになり、日本の北で正偏差が強まり、また、南の高気圧も張り出して日本付近に梅雨前線が停滞するようになった。ただ、例年オホーツク海付近にみられる高気圧は今までのところはっきりしていない。

(3) 热帯太平洋の状況

5月のエルニーニョ監視海域(北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度、下図中太枠)の海面水温偏差は、0.2であった。太平洋赤道域の海面水温は、東経150度から西経105度にかけて平年より低く、東経155度から西経125度付近には0.5以下の負偏差が見られた。一方、東経140度付近と西経100度から西経90度にかけて+0.5以上の正偏差が見られた。5月の南方振動指数は+0.3(暫定値)であった。

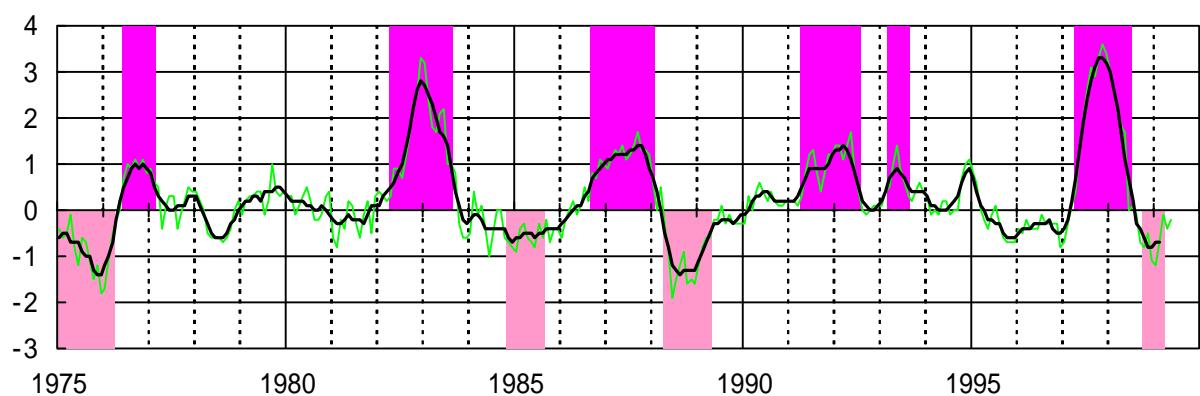
(南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正(負)の値は貿易風が強(弱)いことを示す。)



1999年5月の海面水温平年偏差図

海面水温平年偏差図の太線は1毎、細線は0.5毎の等値線を示す(平年は1961～90年の30年平均値)

エルニーニョ監視海域の5月の海面水温は4月よりも平年にやや近づいたが、依然負偏差の状態が続いている。海面水温偏差の5か月移動平均値は6か月(1998年10月～1999年3月)連続して-0.5を下回り、1989年以来10年ぶりに気象庁のラニーニャ現象の基準を満たした。



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温偏差()の推移(1975年1月～1999年5月)

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は平年(1961～90年の30年平均値)より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は正の領域、ラニーニャ現象の発生期間は負の領域で、それぞれ陰影を施してある。

エルニーニョ監視指数

エルニーニョ監視海域	1998年							1999年				
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
月平均海面水温()	26.1	25.3	24.5	23.9	23.8	24.1	23.8	24.2	25.5	26.8	26.7	26.4
平年偏差()	0.0	+0.1	-0.1	-0.7	-0.8	-0.5	-1.1	-1.2	-0.7	-0.1	-0.4	-0.2
5か月移動平均()	+0.7	+0.2	-0.3	-0.4	-0.6	-0.8	-0.8	-0.7	-0.7	-0.5		
南方振動指数	+1.1	+1.5	+1.0	+1.0	+1.2	+1.0	+1.5	+1.5	+0.8	+0.8	+1.8	+0.3

注: 海面水温の平年値は、1961～1990年の30年平均値である。

4. ラニーニャ現象発生による日本の天候への影響について

(1) エルニーニョ現象発生時との比較

- ・エルニーニョ現象発生時に比べて、天候が平年の状態から偏る割合は小さい。
- ・ラニーニャ現象の日本の夏の天候への影響はエルニーニョ現象ほど明瞭ではない。

(2) 気温に現れる特徴

- ・季節、地域によりバラツキはあるが、「平年並」になる割合が多い。
- ・東北地方の夏は、「平年並」～「高い」傾向がある。
- ・東北地方の秋から冬は、「平年並」～「低温」の割合が多い。

(3) 降水量

- ・東北地方の秋から冬は、「平年並」～「多い」の割合が多い。
- ・東北地方の7～9月は、「少ない」の割合が多くなる。

(4) 梅雨の天候

- ・梅雨の入り・明けの時期は、ともに「平年並」～「早い」の割合が多い。
- ・降水量には平年からの偏りは見られない。

(5) 台風

- ・発生数、接近数ともに、平年からの偏りは見られない。

5. 梅雨について

梅雨は春から夏に移行する過程で、その前後の時期と比べて雨が多くなり、日照が少なくなる季節現象です。季節の変化は、ある日を境に明瞭にその季節に入り又は終わることはなく、双方の季節が交互に現れる遷移期間を経て変化しています。このため、梅雨の入り・明けの時期を遷移期間（平均的に5日間程度）の概ね中日をもって「日頃」と表現しています。

この時期、日本付近は梅雨前線や低気圧の影響を受けやすく、年による違いはありますが、特に梅雨末期には南から暖かく湿った空気が流れ込んで梅雨前線の活動が活発となり、大雨となりやすいことから、土砂災害等防災上の注意が必要な季節です。

梅雨入り・明けの時期

年	東北南部		東北北部		梅雨期間の降水量 (mm)					
	梅雨入り	梅雨明け	梅雨入り	梅雨明け	青森	秋田	盛岡	仙台	山形	福島
1991	6.10	7.27	6.10	8.14	371.0	705.0	564.0	451.0	395.5	378.0
1992	6.8	7.24	6.8	7.29	125.0	143.0	209.5	238.0	240.5	352.5
1993	6.3		6.3							
1994	6.19	7.12	6.19	7.13	94.5	155.5	89.5	114.5	114.0	95.0
1995	6.3	7.23	6.14	7.23	95.0	224.0	305.0	263.0	244.0	262.5
1996	6.10	7.24	6.11	8.6	188.0	341.5	320.5	239.5	162.5	169.0
1997	6.2	7.18	6.2	7.17	130.0	226.0	225.0	366.5	382.5	242.0
1998	6.3		6.3							
1999	6.7		6.7							
平年	6.12	7.23	6.14	7.26						

注：上記の日付は遷移期間の中日を示したものであり、「頃（ころ）」をつけて読み替える。

「」印は、梅雨明けを特定しなかったことを示す。

梅雨期間の降水量は、梅雨入りの時期の概ね中日から梅雨明けの時期の概ね中日の前日までの日単位の降水量の合計値である。